

『伊勢物語』第六段の主題と学習指導

A Learning Guidance of the Sixth Episode of *ISE-MONOGATARI* Based on its Subject

奥田 哲也*・弓削 繁**

OKUDA Tetsuya and YUGE Shigeru

キーワード：『伊勢物語』 主題 白玉 国語総合 学習の手引き

1 はじめに

『伊勢物語』の第六段は、一般に高校一年生が履修する国語総合の教科書に「芥川」と題して採り上げられている。いま三省堂『高等学校国語総合 改訂版』によってその本文を掲げると次のとおりである。

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。行く先多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいとみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓・胡籥を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつみたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを

これは、二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのおとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとり返したまうてけり。それをかく鬼とは言ふなりけり。まだいと若うて後のただにおはしける時とや。

本段を授業で扱う時期は、それぞれの学校の事情によって多少の違いはみられるものの、概ね文法については用言の学習が終わって助動詞の学習に入る頃ではなかろうか。然るに、このように古文に触れてまだ日の浅い高校生にとって、本段の主題や表現を十分に理解することは相当に難しいことのように思われる。実際、教科書に示された「学習の手引き」にしたがって授業を行ってみても、なかなか腑に入る成果が得難いのである。

それは語彙、表現、ストーリーとも一見易しく、取っつきやすそうに見えながら、その実国文学研究者が指摘するように、本段の背景には、女をおぶって逃げることや足摺りをして泣くことの民俗(呪術性)¹⁾、「川」や「蔵」の担う境界性²⁾、『日本霊異記』『今昔物語集』などの説話世界から『源氏物語』へと連なる「鬼」や「神」に関わる怪異譚や女を失った男の哀傷物語の系譜³⁾など、さまざまな要素が輻輳しているからであろう。

そこで、本稿ではまず国文学研究の成果を瞥見しつつ本段の主題を確認し、その上で高校生にどのような学習指導を行うのが適切であるかを、教科書の「学習の手引き」の検討をとおして考えてみたい。

* 岐阜県立八百津高等学校教諭 ** 岐阜大学教育学部国語教育講座

2 第六段の主題

ところで、本段の難解さの原因の一つはこの本文の成り立ちにあるようである。この点については早く折口信夫が歌と詞書との落ち着きの悪さに注目して、「白玉か」の歌は本来女歌であり、河原左大臣源融が五節の舞姫に問いかけた「主や誰とへど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ」（『古今集』雑上、八七三）という歌に対する答歌であったと説いているところであり⁴⁾、同趣の説は高崎正秀にも認められる⁵⁾。ただ、これは『伊勢物語』の本文生成過程における素材上の問題であって、ここではそのような前段階の事情を穿鑿することにさしたる意味はない。

本段はいわゆる「鬼一口」の怪異譚、あるいは男が女を盗み出す嫁取り譚、愛する女を失う男の哀傷物語としての前半（虚相・伝承）と、それを業平と高子（二条后）の恋愛譚として意味づける後半（実相・歴史）とからなっているが、主題を理解する場合に問題となるのは両者の関係であろう。その一つの立場は後半を後人の付加とみるものであり、例えば市原憲は、前半のみの形が原初形態であって、「付帯部分は、二条后物語への参入」とともに、「東国物語への架橋化」を果たすために付け加えられたものであり、その結果「絶対の愛を奪われた人間の絶望の様相」と「純粋な愛の真実」を語るという本来の物語の高い文学性が犠牲にされたと説いている⁶⁾。

一方、早くから後半を史実と捉えて業平と高子の恋に政治的意味を読み解こうとする解釈があるが⁷⁾、近年は成立論にとらわれず現形態を所与のものとして、その表現性に即した読みを求める傾向が強まりつつある。その一つ森野正弘の所説⁸⁾は、一連の二条后章段を時間の構造という視点で読み解くものであるが、森野はその中で、本段の前半と後半との関係を「抽象化された「昔」の時空」に取り残される男と、歴史の時間に組み込まれた女＝二条后との時間構造として捉えている。

確かに『伊勢物語』を全体として統一的に理解するためには現形態に即した読みの可能性を追究することは意味のあることであろう。然るに、『伊勢物語』はあくまでも地の文（詞書）と歌とからなる歌物語であり、本段も他の段と同様に地の文と歌の融合するその表現性について問うことが何よりも大切なことではなかろうか⁹⁾（それは、ひいては「鬼一口」の怪異譚や愛の喪失の物語という伝統の中でのこの物語の位相を明らかにすることに繋がるはずである）。

その点、今西祐一郎の『伊勢物語』第六段の核心は、「鬼はや一口に食ひてけり」といった伝奇性にあるのではなく、（源氏物語の）薫と同様、女を亡くした男の哀しみを描いている点にあるのではないか。鬼一口といった非現実的な要素の印象が強すぎるあまり、この話はたとえば段末の後人注記といわれる文章が示すような寓意的解釈を施されたりもした。しかし、女が死に、最後に男の歌が添えられているという、一篇の単純にして明快な構成を見失うべきではない。」という言¹⁰⁾に耳を傾けておきたい。

そして、そのような視点からすると、就中和歌の作中における表現性に注意した神田龍之介の精緻な読み¹¹⁾が注目される。神田は上の句の「白玉か何ぞと人の問ひし時」を、女との「満ち足りた交感の一瞬」を取り逃がしてしまった男が記憶の中で美しく再構成した表現と捉え、「消えなましものを」という下の句に、「ゆく先」に賭けるあまりに大切な時間を潰えさせた男の悔恨の思いを読み取る。こうして、「未来を望んだがゆえに現在を取り逃がし、過去を追うがゆえに現在にいや増す苦悩を受けるといふ、「時」をめぐる「男」のおろかで痛ましいあり方」に本段の悲劇性を見るのである。

この読みには恐らく概ね異論はないであろう。あるとすればただ一点、自ら交感の可能性を閉ざしてしまったからこそ「許しがたい存在としての自己の消滅が祈られることにな」ったと説く点である。確かに男が深い後悔や喪失感に苛まれたことは間違いのないところであるが¹²⁾、「自己消失」を願う理由としては、むしろそのような後悔や喪失感の由って来るところこそが問われるべきであろう。此岸に一人取り残されて詠歌する時点から回想すれば、「白玉か何ぞと人の問ひし時」は、男にとって女と心を通わせることのできた唯一の機会だったわけである。つまり、その「時」は神田のこぼを

借りれば、「白玉か何ぞ」の問いが発せられたときには、女は「男」の背に負われていたのである。そうであれば、女の声は「男」の耳朶の間近に聞こえていたはずであり、そして「男」の背には、女の体の柔らかさや温かさ、あるいは重みといった体感的な一切が感じ取られていたはずである¹³⁾というような状況にあったわけで、このような状況を勘案するなら、その一瞬は密着した身体とともに心までもが通い合う、最初にして最後の時たり得たはずである。それ故、男は一人取り残された今ではなく、そのような絶頂の瞬間に立ち返って「消え」てしまいたいといっているのであり、そうであれば、そこにはその一瞬を永遠のものとして留めておけばよかったという思いが存することになるろう。そうしていれば二人の愛は真実にまで昇華してははずなのであった。詮ずる所、本段の主題が「純粋な愛の真実を語る¹⁴⁾」点に収斂することはもはや縷言するまでもなからう¹⁵⁾。

因みに、多くの注釈書は男の詠歌を「露のように私の身も消えてしまったらよかったのに¹⁶⁾」と解しているが、ここは「その露のように二人で一緒に消え死んでしまっておけばよかったのに¹⁷⁾」というように解するのが的確であろう。また、教科書の見出しも「芥川」ではなく、主題を象徴する「白玉」のほうが相応しいように思われる¹⁸⁾。

3 「学習の手引き」について

次に、転じて『伊勢物語』第六段が高等学校の教科書でどのように扱われているのかをみておこう。表1は、平成21年度に発行された高等学校用の国語総合の教科書（文部科学省検定済）の一覧である。本段を扱うものは都合16冊あるが、このうち前半の和歌の部分までを採って、その種明かしともいうべき後半を省いたものが12冊、後半まで採るものが4冊である。如上、前半で完結する物語として読むか、後半の種明かし部分までを含めて読むかでは、その解釈が相当異なったものになってくるはずである。そこで、各教科書の扱い方を「学習の手引き」（「学習」とも）によって検討してみたい。

全ての教科書に共通するのは、「学習の手引き」に「白玉か」の歌に関する問いがあることである。歌物語において歌は地の文の叙述（物語）を集約的に受け止めるものであるから、歌に関する問いがあるのは当然である。一方、地の文は歌に向かって展開する叙述であるから、その表現内容についての問いもまた重要である。つまり、明確に主題を捕捉するためには地の文と歌との有機的な関わりを理解することが大切なわけで、そのための問いが用意されていない「学習の手引き」は十分とはいえないのである。

各教科書の表現内容に関わる問いについてみると、全16冊のうち表1の a b d を除く13冊に「女の境遇」についての問いが見られる。前半のみを掲載する教科書にはすべてこの問いがあり、そこでは「夜道の露を実際に見たこともない高貴な身分の人物」（桐原書店）、「名家に育った姫君」（大修館書店）などの解答が求められていて、それを「え得まじかりける」という表現の根拠としているものが多い。この問いの背景には、物語の前提に男と女との間に越えがたい身分差があることを読み取らせようとする意図が働いているものと思われる。然るに、後半を採る場合ならいざ知らず、前半のみのテキストの場合、この物語はもともと現実の制約から解放された「昔男」の物語なのであるから、敢えて女の素性に拘る必要性はないのである。女が「深窓の令嬢」であることは物語にとってさして本質的でないにもかかわらずこれに拘るのは、無意識のうちに後半の種明かしの部分が影を落としているからであろう。むしろここで問われるべきは、物語としての場面性とそこでの男の行動および心情の変化である。

こう考えれば、この段の学習指導の本筋は、場面に即して男の行動を整理し、その時々的心情を丹念に押さえた上で、歌の意味と機能とを理解し、主題を導き出していくところに設定されるべきなのである。しかし、本段を掲載する教科書のうち、男の行動に関する問いの設けられている教科書は表1の d f g l m p の6冊に留まり、残りの10冊にはそれが無いのである。しかも、その10冊の中の多

くは「女の境遇」に関する問いと「白玉か」の歌に関する問いとを並置するのみである。これでは論理に飛躍と不整合が生じかねず、学習者を正しい理解に導くのは覚束ない。

表1 ※「学習の手引き」の項は複数の教科書から典型的な言い回しを選んでそのまま記した。

高等学校用教科書（平成21年度使用一文部科学省検定済） 国語総合27冊（古典教材を扱った教科書は23冊。4冊は現代文編）	
伊勢物語第六段を扱った教科書	16冊
① 第六段の前半・後半ともに掲載してある教科書 4冊	
a 高等学校 国語総合 改訂版	(三省堂)
b 新編国語総合 改訂版	(三省堂)
c 国語総合 改訂版	(教育出版)
d 国語総合	(数研出版)
② 前半のみ掲載してある教科書 12冊	
e 新編国語総合	(東京書籍)
f 精選国語総合	(東京書籍)
g 国語総合 古典編	(東京書籍)
h 新編国語総合 改訂版	(大修館書店)
i 新 精選国語総合	(明治書院)
j 精選国語総合古典編 [改訂版]	(筑摩書房)
k 国語総合 [改訂版]	(筑摩書房)
l 高等学校 新訂国語総合 古典編	(第一学習社)
m 高等学校 改訂版 国語総合	(第一学習社)
n 探求 国語総合 (古典編) 改訂版	(桐原書店)
o 展開 国語総合 改訂版	(桐原書店)
p 発見 国語総合	(桐原書店)
学習の手引き	
歌に関する設問	
「「白玉か…」の歌には男のどのような気持ちが表れているか、考えてみよう。」 a b c d e i j k 「「消えなましものを」には、男のどのような思いがこめられているか、考えてみよう。」 h 「男は翌朝、女の姿がないことに気づいたとき、どのように思っただろうか、歌を手がかりにして考えてみよう。」	

<p>l m 「白玉か…」の歌はどのような役割を果たしているか、話し合ってみよう。」</p> <p>f g 「白玉か…」の歌の中から、会話の部分を抜き出し、それぞれだれの言葉か考えてみよう。」</p> <p>n o p</p>
<p>女がどのような人物か(どのような境遇なのか)を問う設問</p>
<p>「女は、どのような人として描かれているか。また、それは、どのようなところからわかるか。」</p> <p>c 「女」はどのような身分の人か、根拠をあげて説明してみよう。」</p> <p>j k 「女のえ得まじかりける」とあるが、女はどんな境遇の人だと思われるか、論拠を指摘して、説明してみよう。」</p> <p>i 「かれは何ぞ。」という言葉から、女はどのような人物であると考えられるか。」</p> <p>e f g h l m n o p 「草の上に置きたりける露」について、次のことを考えてみよう。 1 女は男に何と尋ねたのだろうか、男の歌と照らし合わせて考えてみよう。 2 このことから、女はどのような素性の人だったと思われるか、話し合ってみよう。」</p> <p>l m</p>
<p>男の行動や心情に関する設問</p>
<p>「前半を読んで男の行動を整理しよう。」</p> <p>d 「男の行動を整理し、その心情の変化を想像してみよう。」</p> <p>p 「物語の展開に即して男の心情を整理しよう。 (1) 女を盗み出したとき (2) 女が「かれは何ぞ」と聞いたとき (3) 女を「あばらなる蔵」に入れ、戸口で夜明けを待っていたとき (4) 夜が明けて女がいないのに気づいたとき」</p> <p>d 「足ずりをして泣」くとは、どのような心情か。」</p> <p>f g 「かれは何ぞ。」という女の問いに対する男の返事が書かれていないことについて、次のことを考えてみよう。 1 男はそのときなぜ返事をしなかったのだろうか、考えてみよう。 2 男は翌朝、女がいないことに気づいたとき、どのように思っただろうか、歌を手がかりにして考えてみよう。」</p>

l m
あらすじをまとめたり，感じたことに関する設問
<p>「前半と後半とを比べて，感じたことを話し合ってみよう。」</p> <p style="text-align: center;">a b</p> <p>「後半の登場人物の関係を確認しよう。」</p> <p style="text-align: center;">d</p> <p>「この話のあらすじを，だれが，どうして，どうなったのか，という形でまとめてみよう。」</p> <p style="text-align: center;">e</p> <p>「この話のあらすじを，「男」の行動を中心にまとめてみよう。」</p> <p style="text-align: center;">j k</p>
その他
<p>「1 後半は後人の付け加えた注記であると言われているが，この部分があることの意味について話し合ってみよう。」</p> <p style="text-align: center;">2 『伊勢物語』の中で，二条の后が関係する章段を探して読んでみよう。」</p> <p style="text-align: center;">d</p> <p>「絵のそれぞれの場面は，本文のどのあたりにあたるのか，考えてみよう。」</p> <p style="text-align: center;">h</p>

4 本段の主題と「学習の手引き」

前節で述べたように男の行動に関する問いがある教科書はわずかに6冊である。表2にその6冊の「学習の手引き」をまとめてみた。(以下，各社の手引きを検討するが，社名を挙げるのは教科書名では類似して紛らわしいからであって，他意はない。)

まず東京書籍・桐原書店の教科書についてみてみよう。二社の手引きは「女の素性」を考えさせる問いと「男の心情」に関する問いと「歌」に関わる問いという三つの問いから成っていて，一見よく目配りが利いているように見える。しかし，この三つの問いの間には有機的な関連・展開が認めがたく(特に，如上，女の素性を問うことにどのような意味があるのか判然としない)，これでは学習者を主題へと導くには不十分ではなからうか。余程丁寧に扱わないと「男は或る高貴な女を奪って逃げたが，夜の中に鬼に食われてしまい，いっそあの時死んでおけばよかったと後悔するばかりであった」というような，現代語訳程度の浅薄な解釈に留まる危険性がある。それに比べ第一学習社の手引きでは，初めに「かれは何ぞ」と女が尋ねたことと「白玉か」の歌とを結びつけて考えさせ，次いで女から「かれは何ぞ」と問われた時に男が返事をしなかった理由を考えさせ，最後に「翌朝女の姿がないことに気付いたとき，どのように思ったのか」を，歌を手がかりに考えさせるという構成になっている。この設問には，地の文と歌との関わりから主題を導き出そうとする意図がみえて，その点は評価に値する。ただ，男の行動と心情についてもう少し丁寧に読ませる問いがあってもよいように思われる。

注目すべきは，数研出版の教科書である。この手引きには「女の境遇」に関する問いが全くなく，「男の心情」を追うことが軸になっていて，問いに緊密な関係性が認められる。物語の展開に即して

男の心情を整理させる問いは、単にストーリーだけではなく主題に繋がる表現性を捕捉させる点からも有効であろう。表1に示したとおりこの教科書は後半部まで掲載しているが、ここでは「手引き」を使って、物語を明確に前半と後半とに分けて読ませようとする配慮がなされている。はじめに前半を読む際「女の境遇」を不問に付すのは、後半まで読み進んだ段階で、前半とは別に『伊勢物語』を在原業平と二条后との恋物語として理解しようとする読みのあることを学ばせようとする意図によるものであろう。後半まで載せる教科書の場合、ややもすると前半の女の境遇と後半の歴史的事実とを短絡的に結び付けがちであり、そうすると単なる謎解きや種明かしで終わってしまいかねない。そのような浮薄な読みを排する点でも、後半を「発展学習」として峻別して扱うのは有効な手立てであろう。ただ、惜しむらくは前半の物語の展開を「男の心情」に即して丁寧に押さえさせながら、第一学習社の手引きに見られるような地の文と歌との関わりに関する配慮が少しく希薄なことである。

かくして、本段の主題および教科書の「学習の手引き」を検討してきたところからすれば、本段の学習のポイントとしては次のような系統的な問いが設定されるであろう。

- 1 男が、「早く夜が明けてほしい」と願ったのは何故か。

【解答例】

まだまだ遠くへ逃げなくてはならないし、悪天候で不気味な状況から早く抜け出したいから。

- 2 男が女の問いに答えなかったのは何故か。

【解答例】

ゆく先はまだ遠いし、とにかく今は一刻も早くこの不気味な状況から抜け出したいと思い、先を急いだから。

- 3 男が、女の問いに答えなかったのはどうしてか。また、それはどういう機会を逃したことになるのか。

【解答例】

先を急ぐあまり、心の余裕がなかったからで、女と心を通わせ満ち足りた幸せな時を過ごす機会を逃した。

- 4 男は、何故、女を失った朝ではなくて、「かれは何ぞ」と問うた時に、「露と答えて消えてしまえばよかった」と思ったのか。

【解答例】

女が尋ねた時に男がそれに答えて二人で一緒に消えていたとしたら、その幸せな時は永遠となっていたはずだと考えたから。

- 5 この話の主題は何か。

【解答例】

男女にとって最も幸せな時は、好きな人に心を寄せて気持ちが通い合った時で、それは儂く、過ぎ去ってからはじめて分かるようなものである。

表 2

精選国語総合	(東京書籍)
国語総合 古典編	(東京書籍)
【学習】	
①「かれは何ぞ」という言葉から、女はどのような人物であると考えられるか。	
②「足ずりをして泣く」とは、どのような心情か。	
③「白玉か…」の歌はどのような役割を果たしているか、話し合ってみよう。	

<p>発見 国語総合</p>	<p>(桐原書店)</p>
<p>【読解】</p> <p>1 「かれは何ぞ。」という言葉から、女はどのような身分であるとわかるか、説明してみよう。</p> <p>2 「白玉か…」の歌の中から会話の部分を抜き出し、それぞれだれの言葉か考えてみよう。</p> <p>3 男の行動を整理し、その心情の変化を想像してみよう。</p> <p>【表現】 (省略)</p>	
<p>高等学校 新訂国語総合 古典編 (第一学習社) 高等学校 改訂版 国語総合 (第一学習社)</p>	
<p>【学習】</p> <p>☐ 「草の上に置きたりける露」について、次のことを考えてみよう。</p> <p>1 女は男に何と尋ねたのだろうか、男の歌と照らし合わせて考えてみよう。</p> <p>2 このことから、女はどのような素性の人だったと思われるか、話し合ってみよう。</p> <p>☐ 「かれは何ぞ。」という女の問いに対する男の返事が書かれていないことについて、次のことを考えてみよう。</p> <p>1 男はそのときなぜ返事をしなかったのだろうか、考えてみよう。</p> <p>2 男は翌朝、女がいないことに気づいたとき、どのように思っただろうか、歌を手がかりにして考えてみよう。</p> <p>☐ (省略)</p>	
<p>国語総合</p>	<p>(数研出版)</p>
<p>【確認】</p> <p>1 前半を読んで男の行動を整理しよう。</p> <p>2 後半の登場人物の関係を確認しよう。</p> <p>【学習】</p> <p>1 物語の展開に即して男の心情を整理しよう。</p> <p>(1) 女を盗み出したとき</p> <p>(2) 女が「かれは何ぞ」と聞いたとき</p> <p>(3) 女を「あばらなる蔵」に入れ、戸口で夜明けを待っていたとき</p> <p>(4) 夜が明けて女がいないのに気づいたとき</p> <p>2 「白玉か…」の歌について、助詞・助動詞に注意して現代語訳してみよう。また、歌に込められた男の心情をまとめてみよう。</p> <p>【発展】</p> <p>1 後半は後人の付け加えた注記であると言われているが、この部分があることの意味について話し合ってみよう。</p> <p>2 『伊勢物語』の中で、二条の后が関係する章段を探して読んでみよう。</p> <p>【ことばと表現】 (省略)</p>	

5 おわりに

おわりに、上来検討してきたことを踏まえて実際に学習指導を行うとすれば、どのような授業が想定されるであろうか、(奥田の)私案を提示して結びに代えたい(奥田は勤務校においてこの私案に基づく授業を行い、その実践報告も纏めているが、ここでは本誌の性格及び紙数を考慮して割愛することとした)。

1 単元名

・物語の世界－伊勢物語(第六段)－(全8時間)

2 単元の目標

ア 伊勢物語が書かれた時代背景を理解し、物語に対する関心を深めようとする。(関心・意欲・態度)

イ 第六段に描かれた情景や男の心情などを表現に即して読み味わう。(読む能力)

ウ 第六段の主題について、他の生徒との意見交流などを手がかりに、自分の考えを深める。

(読む能力)

エ 文中の用言・過去の助動詞「けり」の文法的な説明ができる。(知識・理解)

学習指導案

日時	平成 年 月 日 第 限	指導クラス	1年 組 男 名, 女 名	指導者	奥田哲也
科目	国語総合	単元名	物語の世界－伊勢物語－ 第六段(芥川)	教科書名	大修館書店 「新編国語総合改訂版」
本時の位置	第7時(全8時間中)				
本時の学習目標	本文の主題について他の生徒と意見を交換し、第六段についての自分の読みを深める。				
クラス観	(例)少人数で家庭的なクラスである。素直で優しい子が暖かな雰囲気を作っている。学習に前向きでまじめに取り組む姿勢には好感は持てるが、内気で線が細く、人前で自分の意見を述べることを苦手とする者が多い。確かな学力をつけることによって、人前で堂々と意見が述べられるように育てたい。				
	学習内容	学習活動		指導上の留意点及び評価	
導 入	<input type="checkbox"/> 第六段の音読	① 教師による範読後、隣同士二人一組のペアで読みあわせをする。		※ 場面を思い浮かべながら読むように指示する。	
	<input type="checkbox"/> 口語訳と本文と	② 指名された代表者が口語訳を読む。		※ 本文と口語訳とが繋がり、本文から	

10分	の対応 <input type="checkbox"/> 本時の目標の確認	代表者以外の生徒は、本文を目で追い代表者の口語訳と対応させる。 ③ 本時の目標が、「グループで第六段の主題について考え、他の生徒との意見交流によって自分の読みを深める」ことにあることを理解する。	場面が立ち上がることを目標とする。
展開 37分	<input type="checkbox"/> 男が女を失うまでの気持ちを読み取り、男が女の問いに答えなかった理由を考える。	④ 男の気持ちについて考え、他の生徒との意見の交流を通して考えを深める。	目標アに対する具体的評価規準と評価方法 [規準] まだまだ遠くへ逃げなくてはならないし、悪天候でこの不気味な状況から抜け出したい、などと答えることができる。 [方法] 観察(発表) [状況Cの生徒への手だて] プリント⑤の解答欄の前の文をヒントに考えるように助言する。
	[発問] 男が、早く夜が明けてほしいと願ったのは何故か答えよ。		目標アに対する具体的評価規準と評価方法 [規準] 先を急ぐあまり、心の余裕なかったから、などと答えることができる。 [方法] 観察(発表) [状況Cの生徒への手だて] 前の発問の解答をヒントに考えるように助言する。
	<input type="checkbox"/> 「白玉」の歌から男の心情を読み取り、主題について考える。	⑤ 歌と地の文との関連について考え、他の生徒との意見の交流を通して読みを深める。	目標イに対する具体的評価規準と評価方法 [規準] 女と心を通わせ満ち足りた幸せな時を過ごす機会を逃した、などと答えることができる。 [方法] 観察(発表) [状況Cの生徒への手だて] 一般論として、好きな女の人の質問を無視するのと、答えるのとでは、その後の男と女の関係にどのような違いを見せるのかを考えるように助言する。
[発問] 男が、女の問いに「露」と答えなかったことは、どういう機会を逃したことになるか答えよ。			

	<p>[発問] 男は、何故、女を失った朝ではなくて、女が「かれは何ぞ」と問うた時に、「露と答えて消えてしまえばよかった。」と思ったのか答えよ。</p>		<p>目標イに対する具体的評価規準と評価方法 [規準] 女の問いに答えて二人一緒に消えていたとしたら、その幸せな時は永遠のものとなっていたはずだと考えたから、などと答えることができる。 [方法] 観察（発表） [状況Cの生徒への手だて] 前の発問の答えをヒントに考えるように助言をする。</p>
		<p>[発問] 第六段の「主題」は何か答えよ。</p>	<p>目標ウに対する具体的評価規準と評価方法 [規準] 男（女）にとって最も幸せな時は、好きな人に心を寄せて気持ちが通い合った時で、それは儂く、過ぎ去ってから初めて分かるようなものであるというように答えることができる。 [方法] 観察（発表） [状況Cの生徒への手だて] 前の発問の解答をヒントに考えるように助言をする。</p>
<p>まとめ 3分</p>	<p><input type="checkbox"/> 本時の学習のまとめ</p>	<p>⑥ 古典を読むことは、字面を追うことではなく、表現に即して具体的かつ立体的に読み解き、主題に迫ることだということを理解する。</p>	

注

- 1) 高木和子「『かひなき』物語の系譜」『源氏物語の思考』所収、風間書房 2002年、丁莉『伊勢物語とその周縁—ジェンダーの視点から—』第五編第十三章「恋と死と鎮魂—第六段への一視点—」風間書房、2006年、など。
- 2) 菊地仁「〈鬼一口〉怪異譚の変成—『伊勢物語』と『日本霊異記』と『今昔物語集』との狭間に読む—」『伊勢物語の表現史』笠間書院、2004年、など。
- 3) 注2)に同。
- 4) 『折口信夫全集ノート編第十三巻』中央公論社、1970年。
- 5) 高崎正秀著作集第五巻『物語文学序説』「伊勢物語の説話群（その一）—伊勢をの海人の物語—」桜楓社、1971年。

- 6) 市原愿『伊勢物語解釈論』第二篇第二章「東国物語の座標」細説」風間書房, 2001年。
- 7) 根本智治「二条后関係章段」室伏信助編『伊勢物語の表現史』所収, 笠間書院, 2004年, に研究史が整理されている。
- 8) 森野正弘『『伊勢物語』二条后章段における時間の構造』室伏信助編『伊勢物語の表現史』所収, 笠間書院, 2004年。
- 9) 山本登朗に, 地の文と和歌との接続を形態面から考察した論考がある。『伊勢物語論 文体・主題・享受』第一章の三「伊勢物語における散文と和歌—接続形式の意味—」笠間書院, 2001年。
- 10) 今苺祐一郎「伊勢物語・恋と死」国文学, 1979年1月。
- 11) 神田龍之介『『伊勢物語』第六段の理解—一作中和歌の表現性を中心に—』中古文学, 2003年11月。
- 12) 丁莉も注1)の著書と同様に「上の句は, 女との逃避行を背景に, 二人が共有する時間を思い出しつつ女の問いに答えなかったことを悔い, 自己消滅を願う下の句「露とこたへて消えなましものを」の反実仮想の言い回しに, いつまでも尾を引くような, 深い喪失感と絶望感が含まれている」と記している。
- 13) 注11)に同。
- 14) 市原は注6)の書で「芥川物語の作者の狙いは, 王朝の闇と影の世界のものである鬼を媒介としながら, 絶対の愛を奪われた人間の絶望の様相と, その結晶である和歌によって, 純粋な愛の真実を語ることであった。」と説いている。
- 15) この点, 夙に坂口安吾が「女を思う男の情熱が激しければ激しいほど, 女が鬼に食われるというむごたらしさが生きるのだし, 男と女の駈落のさまがうつしくせまるものがあればあるほど, 同様に, むごたらしさが生きるのであります。(中略)又, 草の葉をさしてあれは何と女がきくけれども男は返事のひますらもないという挿話がなければ, この物語の値打の大半は消えるものと思われます。(中略)物語が私達に伝えてくれる宝石の冷たさのようなものは, 何か, 絶対の孤独—生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独, そのようなものではないでしょうか」(傍点, 論者)と述べているのが示唆に富む。
- 16) 新日本古典文学大系『竹取物語・伊勢物語』秋山虔校注, 岩波書店, 1997年。
- 17) 日本古典全書『竹取物語・伊勢物語』南波浩校注, 朝日新聞社, 1960年。
- 18) 「芥川」については禁中の芥を流す川(大宮川)とも, 摂津国三島郡を流れる川ともいうが, 現実の川を想定するところだけ具体性が際立って違和感が生じる。ここは川の境界性に注意し, 清浄なる「白玉」(彼岸)と穢れた「芥川」(此岸)との対比として理解すべきではなからうか。「男」は世俗の「芥川といふ川を率て行」ったわけで, 遂に川を渡り向こう側に行くことは出来なかったのである。